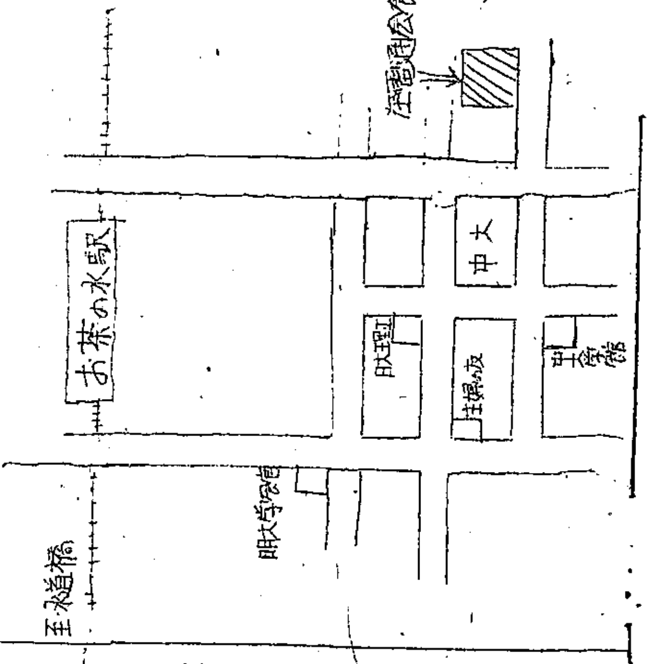
経斗委通信

1969・11・15

日本大学全学共斗会議
経済学部斗争委員会
121号

11・15日大斗争勝利、全国全共斗斗争勝利、佐藤訪米阻止、沖縄斗争勝利に結集した全国の労働者、市民、学生の皆さんに経済学部斗争委員会から熱い連帯の挨拶を送ります。69年を迎え、全国の学園、職場に於て、帝国主義者に対する斗いが激化している現在、佐藤訪米の真の狙いは何か。米国内に於ける黒人問題、財政赤字、ドル危機の進展により米国にとって、沖縄、東南アジアに於ける軍事費の増大を解決するため米帝国主義はアジアからの後退を余儀なくされ、その後を日本帝国主義が肩代わりする形で侵略を深めつつある。その為の沖縄であり、11・17佐藤訪米の真の狙いは「本土の沖縄化」＝現在沖縄からベトナム人民を殺すためにB52が発進しつつあるように、また、水爆を搭載したB52が爆撃をパトロールしている状況を本土に持ち込むことだと思います。そういう社会の大きな変化を促進するために、また、その一環として自主講座部に現在大学にかけられて来ている攻撃として佐藤反動政府による大学治安立法、日大に於ける当局の一・一時経営にかけられる様に大学自治は後退をも一見反合理的の如く、換言すれば佐藤反動政府のもう一つの顔の現われとして現われてこようとする意図を持っています。その一定程度のバロメーターを11・17佐藤訪米によって図っていこうとしているのです。ですから基本的には、それに対しての斗いは避けることが出来ません。しかし我々の当面的には、訪米阻止という一つの運動が学生・労働者・市民の中から継承され、新たな局面を切り開く発展とならなければならないということです。なぜなら日大斗争は10・21斗争、更に、今までの運動が、そうであった様に斗争によって活動家を増やし、それをもって日本反動の暴力装置＝機動隊との斗いという様に斗争を矮小化していったからだと思います。これからはそうではなく、いかに大衆に問題を提起していくか、又、深化させるのかということを重要課題と認めるということを通じて、具体的には9・4以降の「教授会の自己正当化」と言われる様なもらしい斗争形態（民青斗争）と、クラス（グループ）における理論深化（位置付け・総括）、相互批判を通じる中よりの大衆斗争の方向性を探していかなければならないと思います。（換言すれば、クラスの状況に応じた運動・論理的な理論を通じるというパターンの定着化とクラスの総括会の結集）その様な状況を学内に創出することにより学内秩序を解体する方向をもって、学友集会運動の中より経済学部の解放斗争は展開され、我々にとっても真の意味の主体的な斗いを形成しえなければ、11・15集会のスローガンも空語になってしまうと思います。

以上の運動を通じる中より、11・13日大神田地区総決起集会に結集し、新たな局面を主体的に切り開いていこうではありませんか!!



11.13 日大神田地区総決起集会
全電通会館にて
（国電お茶の水下車）
5:30 P.M〜10:00

11.16 佐藤訪米阻止斗争に結集せよ！（日比谷野音にて）
11:00 A.M.

- ・クラスの下学友集結！
- ・学内秩序の徹底的マヒ！
- ・全共斗の下学内秩序集結！
- ・地域解放現実奪取！
- ・安保・沖縄斗争勝利！